

令和6年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業



令和6年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業(主催=日本武道館・合気会・日本武道協議会、後援=スポーツ庁)を、2月8日、研究者8名が出席して日本武道館大会議室で実施した。

本事業では昨年開催された第12回全国合気道指導者研修会(以下、「全国研修会」)を振り返り、次回の全国研修会に向けた内容を協議したほか、学校現場での合気道授業の導入について意見が交わされた。



金澤 威
公益財団法人合気会
総務部長

開講式では、主催者挨拶として金澤威公益財団法人合気会総務部長が「全国研修会は学校教員と連盟推薦者が連携し合う環境にあり、新たに学校で合気道の授業を実施し始めるよい流れができている。より多くの授業が実施さ

れるような研修会の内容を検討し、学校教員がどうすれば合気道を導入できるか、外部指導者が果たす役割とは何かを話し合いたい」と述べた。

開講式後、昨年の全国研修会の振り返りと次年度の内容の検討が行われた。その中で、日野皓正研究者から「2日目の話し合いで、参加者に外部指導者としての意識が根付いていることを感じて驚いた。初日の講義で外部指導者の心構えについての説明があったことが功を奏したと思う。教員間で合気道授業への意識が受け継がれるかは課題であったが、今回の全国研修会には20~30代の参加者もあり、世代交代がうまくなされている印象を受けた」との発言があった。梅津翔研究者からは研修会2日目の合気道指導法について、「内容が過多になることは避けたいが、生徒が動いてくれる声かけについて

はぜひ伝えたい」と発言があった。模擬授業について金澤研究者が「外部指導者の関わり方を見せる模擬授業なので、外部指導者役の講師が全国研修会の授業準備にどのように関わったかを説明したほうがよいだろう。外部指導者が授業の進め方をアドバイスすることは必要だが、全てを仕切ることにはせず、教員を立てながら進めることが大切だ」とまとめた。

午後からは教員に向けた合気道の導入の説明について意見交換を行った。佐藤貴研究者から「コロナ禍以降、人と触れ合ったり人と何かをするという感覚が希薄な中で合気道は適している。力に任せればよいというものではないので、どうすればよいか試行錯誤する中で生徒自身で楽しみを見出しやすい」と所感が述べられ、鈴木俊雄研究者からは「合気道の教え方はこれです、と限定することなく、合気道の魅力を散りばめて打ち出していきたい」と発言があった。



立木 幸敏
国際武道大学
体育学部教授

閉講式では、研究者を代表して立木幸敏国際武道大学体育学部教授が「武道必修化当初は、なぜ合気道を学ぶのかという問いに即答できなかったが、自分に問いかけながら過ごしてきたことで、合気道の利点や特性がかなり明確になってきた。現場の関係者が世代交代するとそれに応じて新たな課題も出てくる。時代に合わせた指導法を議論するこのような場は今後もできるかぎり継続していきたい」と講評を述べた。

最後に、端春彦公益財団法人日本武道館振興部振興課長が主催者挨拶を述べ、予定していた内容をすべて終了した。